

---

# Arcanam

キオナ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Arcanam

### 【Nコード】

N3771Y

### 【作者名】

キオナ

### 【あらすじ】

この世に22つ存在する“神秘刻印”を身に宿した主人公とそれを取り巻く紫緑高校の生徒達との物語

( 1 / 1 )

今日から私立紫緑高校の2年になる私はいつもより早めに自宅を出てみる…

いつもより早いからかやっぱり通学路を歩いている人はいない

いや、1人いた

服装を見る限りどうやらうちの生徒みたいだ

私以外にも人がいるのは珍しく、気になって彼を見ていると前方から鬼の形相をした少女が金属バットを持って向かって来る

少女は彼に向ってバットを振り降ろす

「死ねっアホ直樹っ！」

私は彼が殴られる瞬間を見るのが怖くて目を瞑った

「はあ…しつこいなあ君は。」

私が目を瞑った時彼はそう言った気がした

「ガキンッ！」

耳障りな金属音が静かな朝の住宅街に響き渡り、私はゆっくりと目を開けると少女が不機嫌そうな顔をして

「ちっ、次は逃がさへんでえ…！」

そう言って少女は何処かへ走って行った

彼の姿もいつの間にか此処には無く、残っていたのは凹んだアスファルトと曲がりくねった金属バットだけだった

学校に着くと新しいクラス分けの紙が張り出してあり、それを確認した私はB組の教室へ入ると登校中にいた男子が頬杖を付きながら1人窓の外を眺めていた

私の視線を感じたのか彼は私を一瞬見つめ、すぐに窓へと視線を戻すこの教室内は私と彼の2人だけで、とても気まずい雰囲気…私は思い切って彼に話しかける事にした

「あ、あの…」

普段男子と喋らない私はぎこちない喋り方で彼に話しかけたけれど彼は

「…」

私の方に顔を向ける事もなく無言だったもしかして無視されているのかな？

それとも私の声が聞こえなかったのかな？

そんな風に私は返事が返って来ない理由を予想していると彼がこちらに気付き

「どうしたの？僕に何か用？」

と、焦った顔で言った

どうやら無視されていた訳じゃ無いらしい

「えっと、私は可愛川陽茉莉<sup>えのかわひまり</sup>。今朝…君襲われたよね？」

「あーあ、見られちゃったか…」

彼はそう言いながら手で顔を覆い隠した

私は聞かなかった方が良かったのかも知れないと思い

「誰にだって秘密はあるし知られたくない事だってあるよね？だから私は何も見なかった事にするから安心して？」

「本当に？ありがとう、助かるよ。僕は愚川直樹ぐかわなおき、よろしくね。」

彼の曇りの無い笑顔に私は少しドキッとしてしまった  
男の子にこんな表情を見せられた事がないのが原因かも知れない  
もしかしてこれが“恋”という感情なのかな…

始業式という事もあって、今日の授業は午前中に終わった

私は愚川君の事が無性に気になり観察していると、去年も同じクラ  
スだった“真木まき一葉ひとば”がニヤニヤしながら背中をこしょくつて来た

「ひまりいにも好きな男が出来たのかなあ〜？」

「ちよつ！あつ！こしょくつになつ　ひゃあはつつは！やつ、や  
めてえつ！」

私は背中が弱点だと知っている一葉は私に吐かせたい事や照れ隠し  
する時にいつもこのこしょくつり攻撃をして私を弄っている

あまりに私が大きな声を出した所為で教室に残っていた生徒全員が  
静まり帰り、私達に注目した

「あつ…ああああ〜！」

私は恥ずかしくなつて教室を飛び出したけど、今思えばそんな事を  
したらもつと恥ずかしい…

無我夢中で階段を降りていた私は曲がる時に誰かとぶつかった

「いつ、痛たたた…」

「君、大丈夫？」

そう言つて心配そうに私の顔を覗き込んだのは愚川君だった  
彼の顔が近過ぎて気が動転した私は気を失った

「あれ？何で保健室にいるの…？」

「起きた？」

自分の置かれている状況が理解出来ず、必死に思いだそうとしているとカーテンを捲って風見君が入って来た

「愚川君、私もしかして…」

「うん、急に倒れるから驚いたよ。」

ようやく自分の状況を理解した私はベッドから起き上がり、愚川君にお礼を言っただけで帰る事にした

「ありがとう、私もう大丈夫だから帰るね？」

「じゃあ心配だから送ってくよ。」

風見君は突拍子も無い事を言い、私の手を取った

「だっ、大丈夫だよ！？一人で帰れるから！」

「遠慮しなくて良いって、ほら顔赤いしふらふらしてるじゃん。」

顔が赤いのは風見君が私の手を握っているからなんですけど…

「じゃあ…お言葉に甘えて…」

「うん、行こうか。」

私と愚川君は歩きながら2年生になった心境とかを語り合った  
一緒に歩いているとやっぱりドキドキする…

愚川君はどうなんだろう？

私の手を握ったり、一緒に歩いたりしても私の事を意識しないのか  
な？

「あのさ…私と一緒に帰ったりして良いの？好きな人とか、彼女と  
かいるよね？私といると変な勘違いされるよ？」

「うーん…女の子からしてみればそういうものなの？僕は別に何と  
も思わないけど、もしかして迷惑だったかな？」

「何とも思っていない…か、そうだよね…私が勝手に意識してただけも  
んね」

私のこの感情も多分恋じゃない、きっとそう

「もう此処までで良いよ？送ってくれてありがとね。」

「遠慮しなくて良いよ？僕暇人だし。」

愚川君は優しい、でも 今はその優しさが何故か痛い  
何でだろう…彼はこんなに近くににいるのに、とても遠くに感じる

こんな切ない気持ち今まで味わった事が無い  
これが“恋”なのか  
でも、こんなに苦しいなら“恋”なんてしたくない

「っ！迷惑なの…正直言つて迷惑なの！さっきから遠回しに言つて  
あげてるんだから察してよ！」

「…！ごめん、余計なお世話だったかな…でも決して君に好かれよ  
うとか下心があつた訳じゃ無いんだ、それだけは信じて欲しい。」

愚川君は悪気無く謝っているだけなのにその言葉が更に私に追い打  
ちを掛けた

彼が悪くないのは分かつてる、だからこそ無意識の内に私を傷付け  
る彼に憤りを覚えてしまった

「…じゃあね！」

「あ、可愛川…」

私は愚川君が呼び止めるのを無視して家まで走って行った  
勝手に好きになって、勝手に勘違いして、勝手に嫌いになって

最低だ私

ごめんね…愚川君

「女の子泣かせるなんてほんまにそれでも男なん？」

「媛乃…僕がした事って間違ってたのかな？」

こいつは“時雨媛乃”  
しぐれひめ乃

僕の部活仲間だ

口が悪い関西娘だけど、根は良い奴だと思っ

「何シリアスな面してんねん！この鈍感、アホ、愚図！」

「はあ…女の子って難しいなあ…」

少しは慰めの言葉とか激励の言葉とかを期待していた僕が馬鹿だった  
これじゃあ傷口に塩じゃないか

「そんな事よりアンタ今日の朝練サボるわ、会議すつぽかして女の子をナンパするわ何やってんねん…もう直ぐ大会なん分かってるや  
ろ？」

「ナンパしてたつもりは無いんだけど…」

時雨の言い分は分かるけど、一言余計なんだよな一言が

「フラれて反省したなら学校に戻るで？1分でも時間が惜しいから  
なあ。」

「はあ…だから違っつて。」

若干気持ちに違和感が残るものの、渋々僕は学校に戻る事にした  
河合川には明日ちゃんと謝ろう

学校に戻り、僕と時雨は部室に入るが誰もいない

うちの部活は元々13人所属していたけど、その内11人の3年生  
が卒業してしまったから部員は僕と時雨しかいない

まあ余程物好きじゃないとこんな部活には入らないと思うけど

「ええか？先ずは部員や。部員が少ないと活動停止にされてしまう  
からな。」

「で、どうやって集めるの？」

僕がその事を問いかけると媛乃は暫らく沈黙して

「そ、そこまでは考えとんかったわあ…堪忍な？」

「それを考えてなかったら部員集められる訳ないだろ…まあ校内にポスターでも作って貼れば良いんじゃない？」

僕は最もシンプルな方法を提案してみるが、媛乃はそれを聞くとまるで僕がそういうのを知っていた様に

「じゃあ、貼って来てな？うちは用事あるさかい。」

「おいつ！それは流石に酷いって！はあ…仕方無い、やるか。」

だが、僕はイラストとか描くのは得意じゃない

これは美術部の人にお願いでみようと思いきや美術部の部室へ向かう僕が部室に入るとそこには1人の少女だけがぼつりと座っていた窓からは夕日が差し込み、それに照らされながら静かに絵を描くその可憐な姿は思わず見惚れてしまう程に綺麗だった  
しかし、今はそんな物思いに更ける時間は無い  
彼女しかいないのなら彼女にお願いでみよう

「あのさ、君に頼みたい事があるんだけど…」

「…あ、これ見ないでくださいっ！」

僕がいきなり話しかけると彼女は驚き描いていた絵を後ろに隠した

何でか分からないけどとても恥ずかしがっていた

「ご、ごめん驚かせるつもりは無かったんだけど…その絵の猫上手だね。」

「うう…やっぱり見られちゃったんですね…」

謝るだけのつもりが口が滑って絵を見た事を言ってしまった  
まあ絵が上手いと思ったのは本心なんだけど

「ごめんごめん、僕は2年の愚川直樹。君にうちの部の宣伝ポスターを作って欲しいんだけど駄目かな？」

「えっと、私は1年の葵生川萌あおいかわもえ絵です。あのう…私なんかで良ければ構わないんですけど…その…」

葵生川は何故かもじもじしながら言おうとしている

「な、何？」

「先輩の部活が分からないと…描けないですよ…」

返って来た言葉は意外なものだった

確かに僕は葵生川に所属している部活を言っていない

「ああ、僕は逃争部だよ。」

「…とうそづぶ？」

まあ予想通りの反応だ

この部活は全国の高校の内、47校しか無いから知名度が低い  
おまけに1年生なら尚更知らないだろう  
47と言っても各都道府県に1つ存在している訳でも無く、偏って  
いる地域もあるけど

「うーん、簡単に説明すると鬼ごっこかな。」

「先輩…」

葵生川は軽蔑の眼差しで僕を見つめた  
確かに高校生が真顔で鬼ごっこなんて言ったら引かれるのも当然な  
のかも知れない

「君以外頼れる人がいないんだよ…お願い！何でもするからさ、ね？」

「分かりましたよう…本当に何でもして貰いますからね？」

何とか描いてくれそうだ

でも何でもするって言ったのは失敗だった気がするけど

「で、僕に何をしたいの？」

「じゃ、じゃあ…来週の日曜日に山へ一緒に来てくださいつ」

もっと恐ろしい要求をされると思っていたから安心した  
でも何で山なんだろう

「えっと、構わないけど行ってどうするの？」

「デッサンの練習の為に自然な風景を見に行きたいんですよう…1  
人で行くのも心細いので先輩がいてくれたら安心かなって思ったん  
です。」

成程、僕は子守りをすれば良いのか

絶対こういう子って怖い番組見たら夜中トイレに行けないタイプだ…  
でも見た目通りのおっとりした性格で安心した

「じゃ、ポスター期待してるよ？」

「任せてください あ、でもイラストの参考にそちらに時々お邪魔  
しますからね？」

「うん、いつでも歓迎するよ。」

何とか話が整ったので僕は美術部を後にした

それにしても入学したばかりの1年生が美術部の部員になっている  
なんて可笑しい

部室には彼女しかいないし…

特待生か何かなのかな

「あ、アンタ何帰ろうとしてんねん。まさかまたサボったんかあ…  
？」

校門の前まで行くと時雨が腕を組んで仁王立ちしていた

このまま平和に帰れると思っていたのに残念だ

「サボってないから…ポスターは美術部の子にお願いしたから大丈夫。  
所で時雨はこんな所で何してたんだよ？」

「最近うちの学校の周りに不審者が出るらしいねん、だからとっ捕  
まえてどついてやる思ってたなあ。」

何を言ってるんだこいつ…

明らかに普通の女子高生だったらこんな思考には辿り着かないよ

「それはそれは御苦勞様です、では僕は帰らせて頂きますのでー。」

「おー帰れ帰れ！こんなべっぴん見捨てて帰るなんて薄情な奴しか  
おらんからなあ？」

「えーっと…何処？べっぴんさん見当たらないけど…僕の近くに  
いる君だけだし、まさかのまさかとは思うけどもしかしてもしかす  
ると自分の事言ってるのかなあ？いや、そんな筈無いよね？自分で  
べっぴんとか言わないよフ・ツ・ウは！」

そう僕が惚けながら喋っていると時雨は

「ちいとは褒めてくれたってええやん…直樹のアホ…」

と、しょんぼりしながら言った

いつもの彼女なら間違い無く怒って飛び蹴りして来るのに

「どうした？今日は元気無いけど…道に落ちてる物でも食べた？」

「ええ加減にしいやつ！」

励ましているつもりだったのに逆効果で飛び蹴りを喰らってしまった  
まあこれでこそ時雨なんだから

「どや？参ったか！」

「最高に…気持ち良いです。」

「この変態野郎っ！」

僕と時雨がじゃれていると、不良っぽい茶髪の男がこっちに近付い  
て来る

服装を見る限り、他校の生徒の様だけど…

多分絡まれる可能性が高い

もしやと思って隣を確認したら、予想通り血の気の多い誰かさんは  
臨戦態勢だ

「お前ら…この学校の生徒だよな？聞きてー事あんだけど良いか？」

> i 3 4 5 8 2 — 4 3 7 1 <

「アンタかぁ？最近うちの学校に現れる不審者は？」

質問を質問で返すなよ時雨…

いくら不良っぽいからって不審者なんて言いがかり誰だって怒るよ

「何言つてんだ、話を聞きてーだけなのにお前らの学校の奴らが逃げるから仕方無くうつろついでんだろーが。」

「それを不審者っちゅうねん！で、聞きたい事ってなんやの？」

確かにその見た目で近寄つて来たら逃げられるのも無理は無いかも僕も時雨がいなかったら一目散に逃げていたと思う

「この学校の逃争部に案内してくれねーか？」

意外な言葉が彼の口から発せられた

僕達の部活に何の用だろう

唯でさえ部員不足で廃部寸前だというのに

「僕達逃争部だけど…？」

「マジか！？そいつは話が早え、俺を入部させてくれ！」

「入部つて、アンタうちの生徒ちゃうやん！」

「その点は対処してあつから大丈夫だつて。な、良いだろ？」

「直樹こいつどうすんの？」

今はそんな細かい事気にする余裕は無いのかも知れない  
順調に部員が集まらなくてたった1人足りないばかりに廃部にされるって時に悔しいし、いつそ他校の生徒でも構わないか

「良いよ、君の入部を認める。」

「ちよっ、ええのほんまに！？こいつ何やらかすか分からんで！」

「今はそんな事言つてられないだろ。僕達は猫の手も借りたいぐらいなんだから。」

「よっしゃ！その女と違って話が分かる男だな。また明日来るぜ？あばよ！」

「何やて！？もういつペン言つてみいや！ちっ…絶対明日シバいてやるう…」

何はともあれこれで部員は3人

この世の中にも物好きもいるもんだ

後1人集めればギリギリ廃部を免れる

葵生川のポスター効果で集められると良いけど…

進級したばかりのクラスの雰囲気というのは不思議だ

まあ周りが知らない人ばかりだとそりゃあ気まずいよな

僕の場合、この雰囲気よりも昨日怒らせてしまった可愛川が隣の席に座っている方が気まずいけど

謝りたいのは山々なんだけど、どう話しかけるのがベストなんだろう？

僕が思考を練っていると可愛川が急に席を立って僕を見つめた

「あのさ、可愛川…昨日は」

「ごめんねっ！」「ごめん。」

可愛川と僕は同じ言葉を口にした

「私が悪いの！私が勝手に愚川君を好」

「皆良く聞けエ！今日は転入生を紹介するゼッツ！カモン塔ヶ崎イ  
！！」

可愛川が何かを言いかけた時、僕らの部活の顧問兼担任の“とみみちせい富満静六”ろく先生が教室に入って来るなり叫んだ

この先生はめちゃくちゃテンションが高い、名前が性格と真逆で全く似合わない

昔はスポーツ選手だったらしいけど怪我で引退して、それならばともう一つの夢だった教師になったらしい

教師としては優秀だけどそのハイテンションぶりの所為でクラスはしらせるし、今だって僕と可愛川の仲直りを邪魔するし…少しは空

気を読んで欲しい

お陰で可愛川がなんて言ったか聞こえなかったじゃないか  
しかし、こんな時期に転入生とは一体どんな人だろうか

「俺は塔ヶ崎登弥ってんだ、よろしく。」

成程…対処してあるってのはこういう事だったのか  
まさかうちの部活に入る為にわざわざ転校して来るとはね

「自己紹介も済んだしッ！塔ヶ崎はこの机と椅子を運んで好きな席  
に座れエ！」

んなめちやくちな…

こんな事されたら流石に塔ヶ崎も困るだろ

「マジっすか？じゃあ俺あいつの隣の席にするんで。」

そう言つて塔ヶ崎は可愛川の席を後ろにずらし、すんなり僕の隣の  
席に座つた

可愛川は今にも泣きそうな顔をして俯いていた  
その姿を見て僕は塔ヶ崎に対して怒りを感じた

「よっ！今日から世話になるぜ？」

「断る、君は入部拒否だ。」

「ああ！？昨日は良いって言ったじゃねーかよ！」

「ごうしよう…僕と君は勝負して僕が勝つたら君は席変える、君  
が勝つたら入部を認める。」

「気に食わねえが面白え…その勝負乗ってやるよ！俺の実力見てビ  
ビんじゃねーぞ？」

「放課後、うちの旧校舎の体育館に集合で構わないね？」

「へっ便所だろうがプールん中だろうが構わねえよ。」

放課後になり、僕は可愛川にもう一度謝る事にした

「僕の所為で今日も嫌な気分になったよね？本当にごめん。」

「愚川君は謝ってばかりだね…」

「ごめん…」

「ほらまた謝ったよ？あのね、愚川君は私に優しいけど…その優しさは私にだけじゃない。そう思うと悲しくて辛くて腹が立って…だから昨日はあんな事言ったの。悪いのは私、愚川君は謝らなくて良いの。」

「可愛川…！ありがとう、僕必ず君を元の席に戻すから！また明日ね！」

「愚川君！元の席に戻すってどういう事　行っちゃった。」

私はこの時やっと認めた

彼に対して抱いていたこの気持ちは大好きなんだっていつか、いつか彼に振り向いて貰えるまで私はその背中を追い続けよう

例えこの恋が叶わなかったってきつと後悔はしない彼が笑っていてさえくれればきつと私は幸せだから

「遅えぞ？愚川。さあやろうぜ！」

「ああ。」

僕が旧校舎の体育館に入ると塔ヶ崎は待ちくたびれた顔をして寝転がっていた

勝負と言っても喧嘩をする訳では無い

逃争部のルールに則り戦う

逃争部とは決められた範囲の中で敵の背中に付いているライフマーカー残命計を壊

し合う競技、エスケパル逃争を行う部活だ

この競技は槍・剣等の武器の使用は可能だが、火器・銃器等は禁止この様に危険な競技である為、協会が認めた学校にしか部活は存在しない

「愚川：武器は使わねえのか？」

「生憎これが僕の戦い方なんでね。」

「ふざけやがって！テメエをぶっ飛ばして嫌でも俺の実力を認めさせてやる！」

塔ヶ崎も持っていた刀を捨て、拳で向かって来る

僕が避けた拳はそのまま壁にぶつかり粉々に砕け散った

いくら老朽化で古くなっているとはいえここまで木端微塵に出来るのは人間業じゃない

「ビビったろ？これが俺の実力。怪我したくなきゃ土下座して謝りな！」

「それは出来ないよ、僕は可愛川と約束しちゃったからね。」

「テメエ…いつまでも調子こいてんじゃねえぞ！」

塔ヶ崎はそう叫び、床に向かって拳を振り降ろすと体育館が大きく揺れ崩壊し始めた

僕はこいつに対してある疑念を抱いていたが、この“力”を見て確信した。こいつは

「やっぱ大した事ねえな…ちょっと本気出したぐらいで死ぬんだからよ。しっかしこんな派手に壊れちまうとは相当古ぼけてやがんなこの校舎…バシたらめんどくせえし帰るか。」

「勝手に殺さないでくれるかな？」

「！…有り得ねえ…校舎も纏めて潰したのに何故生きてやる…」

「僕も君と同じ“力”を持っているからだよ。その能力を見る限り  
“ジ・タワー塔”だろ？」

この世界には大アルカナの力“アルカナムガントレット神秘刻印”をその身に宿す人間が2  
人いる

僕の推測では塔ヶ崎はその内16番目の“ジ・タワー塔”の“アルカナムガントレット神秘刻印”の所  
有者だ

おそらく、触れた物を崩壊させる能力  
一発でも触れられたら即死するだろう

「だが分かった所で逃げてばかりのテメエに何が出来る！」

「逃げてばかり…か、確かにそうだね。僕も“力”を見せてあげる  
よ。」

「はっ！今更遅せえんだよ！この攻撃はテメエじゃ避けきれねえ、  
俺の勝ちだ！」

「いや、僕の勝ちだ。」

「はあ！？何言ってるやが 体が動か…ねえ…！？」

塔ヶ崎が驚くのも無理は無いだろう

僕の能力は“アルカナナムガントレット神秘刻印”の中で最強と自負出来る程だ  
いくら人知を遥かに超えた“ジ・タワー塔”でも僕の“力”の前には無力だ

「テメエ何しやがった!？」

「僕の“アルカナナムガントレット神秘刻印”、“ジ・フル愚者”は非現実の現実化。実際には起こり  
得ない事を現実出来るんだ。例えば今みたいに塔ヶ崎の自由を封  
じる、とかね。勿論君を殺す事だって出来るよ?まあ逆に実際に起  
こり得る事は出来ないけど。」

「んなもんハツタリだろうが!信じる訳ねえだろ!」

「うーん…じゃあ、突然宇宙人がやって来て君のライフマーカー残命計を壊すつて  
のを実際に起こしてあげるよ。」

「はあ?やれるもんならやってみるよ!」

自分ですら現実離れした事してるのに、僕の事を全く信じようとし  
ないなんて…

まるで一般人の反応じゃないか

僕が念じると所謂グレイタイプの宇宙人がやって来て塔ヶ崎のライフマ残命  
計を壊した

「  
× ÷ ? = ¥  
」

「げっ、マジで宇宙人呼べんのかよ!何喋ってるか意味不じゃねー  
か…」

「ね?これで信じられるだろ?」

「クソツ！愚川…テメエの勝ちだ。」

こうして旧校舎を巻き込んでの戦いを終えた僕と塔ヶ崎は部室に戻った

「良いのかよ？俺は負けたんだぜ？」

「僕が勝ったら始めからこうするつもりだったんだよ。これからよろしくね。」

「！…チツ。」

この後塔ヶ崎は正式に逃争部の部員になり、可愛川に席を返した

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3771y/>

---

Arcanam

2011年11月10日08時04分発行